

「衛生気象」覚え書—終戦まで—

神 山 恵 三*

日本の生気象学の歴史を語るという任は、とても、筆者だけで、それをおおうことはできない。医学、工学、農学、生理学の各方面でこの生気象学を研究している人達がいるからである。

だが、日本の生気象学の歴史の中で、気象関係者が果たしたのも決して少なくないことも事実である。このことを論ずるだけでもかなりのものとなり、これも、筆者1人の分量もはるかに超えている。

そこで、昭和13~14年より、終戦にいたる衛生気象学という名のもとにおこなわれた、生気象学の分野で、しかも筆者が関連したもののみについて覚え書きの程度で、記述していきたいと思う。

その他の戦後部分については、多くの人が関連しているので、記録は消滅しないと思うからである。この部分については、

私は昭和14年3月、気象技術官養成所を卒業した。1人1人、その当時の中央気象台長である岡田武松博士の部屋に呼ばれて、それぞれ任地の申渡しを受けたのであった。

「第1部予報掛勤務ヲ命ズ」という薄い紙の辞令を、岡田台長より手渡された。その辞令文のわきに「衛生気象掛」という鉛筆書き文字が書きそえてあった。

「衛生気象掛？」私はげげんそうに、そっとその文字を読んだ。

「増山さんのところで勉強してくれ給え、衛生と気象との関係を研究してもらうんですよ」と岡田博士は、とまどったような私の顔を見て、にこにこ笑いながらそういった。

何んの気まぐれかは知らないが、岡田博士が、その辞令に書きそえた、鉛筆のはしり書きの文字が、その後の私の一生を決定してしまったわけである。

岡田博士にしても、藤原暎平博士にしても、生気象学には、かねがね興味を持っていたようである。

岡田博士はすでに昭和10年6月20日に内閣統計局で“気候と人生”という講演をやっているが、気候と衣服、食物、住宅気候、気質と気候といった問題にかなり精しく、その当時としては程度の高い話をしていた。また、藤原博士と共に、日本の温泉気候学会の設立にはあづかって力あった。

藤原博士は、「気象と人生」などの本の随所に生気象の問題を述べていた。

ちょっと横道にそれるが、藤原博士のことについて、触れておきたい。気象研究所の図書に藤原文庫の書棚がある。ここには、藤原博士の多方面の研究分野の関連文書が未整理のまま置かれている。博士がずい分多方面の勉強をしていたことが伺えるが、その中に生気象学関係の文書がかなりある。博士が、生気象学という観点に立って、医学方面の学者ことなり連絡があったこともうかがえる。この藤原文庫について将来整理が行われることを期待したい。

さて、「増山さん」の所で勉強するようにといわれたが、そのときすでに、増山元三郎氏は、気象台と東大物療内科の両方で仕事をしていた。

気象台と東大物療内科とは岡田、藤原博士以来密接な連絡があり、日本温気候学会が物療内科にその事務局がおかれてあったこととも関連がある。

物療内科教室の30年史の一節に「昭和14年来気象学者の参加協力によって漸次新見業績の発表が出つつあり」と記されている。増山氏の参加のこと記したものである。

気象技術官養成所の入学試験の体格検査が毎年物療内科で行われてきたことなども両者の関係の深さを示す一例であったろう。

増山氏の気象病に関する世界的な研究は岡田、藤原両博士の生気象学に対する理解とバックアップが一つの背景にあったことは確かであろう。

卒業直後私が入った部屋は、竹平町の時計塔の前にあった予報掛の2階であった。気象庁が建て替えになる前、

* K. Kamiyama 気象研究所応用気象研究部

一時、予報部長室であったこともあった部屋である。

高橋（浩）、大間、坂田氏など当時若手中堅の人びとが、部屋の中央に背を向けて、みんな勉強していた。

そして、ある一定の時刻がくると、一様に振りかえって、顔を合らし、カンカンガクガクの議論や談笑をした。この時期の先輩の勉強振りは卒業直後の私に大きな刺激を与えてくれた。

増山氏は、「こんなことをやって見たい」というと、その問題に関する文献を各方面から取り寄せ揃えてきてくれた。

だが、自分で、問題を持たない限り、なんともいってくれなかった。そして“早く専門家になれ”ということをついもいってくれた。

このやり方も、その後の私の行き方にもおおいに影響を与えたと思っている。

「紫外線と体との関係を研究したい」と、増山氏に申出たところ、Bültner の *Physikalische Bioklimatologie* の本を借してくれた。

この本も、その後の私の進んだ生気象の1つの方向を決めたようであった。

藤原博士と同郷の慈恵医大の矢崎芳夫氏も紫外線の研究をやっていた。藤原博士の紹介で矢崎教授の所へも出入りした。

15年1月塩化モリブデン酸アンモンによる紫外線の測定法について、それを検討することで、冬の富士山に登った。

この冬富士観測は測候課の三浦栄五郎氏に頼み込んで、気象観測員として加えてもらったのである。大田正次氏が班のリーダーであった。氏は冬富士山の登り方からシュルツのダストカウンターの話まで山の滞在中、後輩のめんどうを見てくれた。

昭和15年2月、その観測中に、山頂で、召集令状を受けて、千葉の気球連隊に入隊した。

別に衛生気象掛勤務であったというわけでもあるまいが、千葉の気球連隊の衛生兵となった。

衛生検査室に入ったおかげで、いろんな衛生検査を実戦訓練受けたのは、決して損はしなかったと思っている。

大後美保氏の編集で、“紫外線の生気象学的研究という総説を書いたがその別刷を医務隊の隊長にうやうやしく進呈したことが、かなり彼の心証を良くしたようであった。

本来ならば、こんな行為は、かえって“心証を悪く”するものはずだが、その隊長は人の良い人だったのであろう。

召集解除になったのは、その年の12月であった。わずか、8カ月間であったわけである。

ノモンハン事変ではひどい反撃をうけてはいたが、いやそんな行きつまりもあっていよいよ、太平洋戦争に突入というおおぼちを日本のファシズムは行おうとしているときであった。気象台も、その一年たらずで、ずいぶん雰囲気が変わってしまっていた。

召集解除後、藤原博士のところに行って、あいさつをして、「今後、何所に勤務すべきか」ということを聞いた。

「忙がしくなってきたから予報の現業をやってもらおうか」と、博士はしばらく考えていたが、そういった。

その話を聞いて、実は私もいく分ほっとした、この非常時に衛生気象をいつまでも続けることもあるまいと心の片隅では思っていたからである。

岡田博士のところへ行って、召集解除のあいさつかたがた「藤原先生から予報の現業をやるように」といわれたことをつけ加えた。

岡田博士は、私のことはば聞くと、一瞬厳しい顔付きとなり、私の顔をじっと見つめた。

「いや、増山さんのところで今まで通り衛生気象をやりなさい」と断固たる調子でいった。

もう戦後だい分後になって、両博士の私の身分の取りあつかいの違いについて考えてみるのであった。

岡田博士は、太平洋戦争の進行と共に、職を辞して、気象事業の軍事化に無言の抵抗をした。藤原博士は、そうではなかった。むしろ、戦争遂行に積極的な任務も果たした。

両博士とも、別に私の個人的な能力を問題にしたことではなかったが、藤原博士は、気象事業の軍事化に流れていく方向に、もはや、衛生気象などは重要視しなくなっていたことであり、岡田博士はそうした流れを苦々しく思っていたため、少しでもその流れを大きくするようなものには抵抗を示した、そのあらわれとして、私の直属の上司である藤原博士の意向を無視して、違った決定をしたのであろう。

そして、召集解除の日、昭和15年10月1日と同時付けで三宅泰雄氏が課長となっていた、調査課勤務となつたのである。

岡田台長は、いままで衛生気象掛が予報課にあったのを、直ちに調査課に所属変えをして、増山氏と私とをともども、その課の衛生気象掛へと移したのである。

増山氏は、気象病の客観的検証の必要性から少数例の統計法一推計学の理論的、実践的な課題を追求して、次

々に新しい問題を提起していった。

私は三宅氏のもとで、ルッポはさみの使い方から初めて、化学実験の手法など基本的な指導を受けながら東京の各地点においた煤塵計の降下煤塵の全分析、温泉生気象の研究、皮膚面における収支など、興のおもむくままの問題を次々にあさっていった。

16年12月8日、太平洋戦争突入の夜は、朝潮丸の船上にあった。海上を離れるに従って、海上空気中の細塵がどのように減少していくかを調査をしていたときであった。それ以後急速に気象台は、いっそう軍事化の体制をとっていった。

荒川秀俊氏を課長とする調査課ができ衛生気象掛はそれに属した、いままでの調査課は化学課となつて、私はそこに兼務となつた。しかし、仕事はこれまで通り三宅実験室の一室で、空気中に、ときどきシャワーのように入ってくるギブスの微晶子の顕微鏡写真などを夢中になって追かけていた。

北大の現在の低温研以前は、理学部の前に木造の低温研であった。その一部は、その頃陸軍が接収して、九徳少佐という軍人がいて北方方面気象に幅をきかせていた。苫小牧近郊の沼の端に半地下壕の兵舎があり、そこが、寒冷と湿気のために、兵隊が困っているというので、寒冷地の衛生気象について調査をするようにという話が、その九徳少佐から、藤原博士を通じて入ってきたようであった。

ひどい結露状態が兵舎全体にひろがっていた。結露と低温に対する対策を盛った報告書を出したが、それはどうなったかわからなかった。それと前後して、樺太の敷香測候所について寒冷下での唾液の pH がどのような変化を受けるなどの研究も行わせて貰った。

空襲はますますさかんになってきた。岩村田、諏訪、岡谷の各方面に分かれて気象台の研究関連分野の疎開が始まった。

その頃、㊦と暗称されている暗視兵器を、戸山町にあった陸軍技術本部で研究されていた。

故川畑氏は、その熱線に敏感な放射センサーの研究でそれに参加していた。

わたくしも、塵埃や視程の研究をやっていたので、暗視器放射センサーと、その目標体との間の塵埃などによる熱線の吸収の測定を分担して、その軍事研究に協力した。浜名湖に炉を入れた船を浮かべて、その船の発する熱線を放射デテクターで追跡するのにあたって、空中の塵埃によってどの程度、その熱線が吸収されるかという問題を請負った。そんな仕事がエスカレートして、瀬戸内海の宇高連絡船を女木島に陣取った㊧班が、無線で連絡船に連絡し、航路の許容範囲であろうが、適当に島との距離を動かしながら、船体からの熱線を追跡した。私は、小舟に乗って、その間の浮遊粒子を測定し吸収量を求めた。夜光虫がきらきら光る波の上で行っている灯火管制下の仕事、おそらくは船客は何も知らないだろうと思いつつやっているその仕事には余りよい気分ではいられなかった。

川畑氏とそんな関係があったので、川畑氏が上諏訪に疎開したときに一緒に疎開した。増山氏は東京に残って、戦災をこうむった物療内科の一室で研究を続けていた。

昭和20年4月には、松本市の現在の深志高校（当時松本医専）の一室に、松本臨時出張所ができ、小平氏今井氏と共にそこで落ち着くことになった。そこには別に文部省の学術振興会の一部も疎開していた。

渡辺明氏や小山八洲夫氏そしていまは労働省労働衛生研究所にいる興氏などと共に、一緒になって浮遊塵埃やその頃、長野県各地に建設されようとした地下工場の地下環境の調査、あるいは、上高地などを中心とした高山療養気候の研究などを進めた。地下環境の調査については、陸軍軍需関係と交渉が必要なので、東京の参謀本部に出かけたが、もはやなつかは荒涼とした雰囲気のみがぎっていた。

やがて終戦となった。